

JIM-NET 便り

2024 7月号

発行：2024年7月31日

特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4丁目4番11号 内藤ビル2C
電話 03-6228-0746 メール info-jim@jim-net.net



JIM-NET
الشبكة الطبية اليابانية العراقية

お陰さまで
JIM-NET
発足20年を
迎えました。



目次

- 現地スタッフ会議を実施しました！ 齊藤亮平（海外事業担当）…………… P2-3
- JIM-NET20年を迎えて 鎌仲ひとみ（JIM-NET 理事・ぶんぶん・フィルムズ代表）・熊岡路矢（日本映画大学教員・JVC 顧問）…………… P4-5
- 『JUSTPEACE！ 20』 JIM-NET 企画展 崔麻里（事務局長）…………… P6
- 時代の転換点の現場証人 田村公祐（株式会社エインシャントワールド）…………… P7
- 「マンスリーサポーター」のお願い／♡ COFFEE for PEACE！♡ 第4弾 coming soon！…………… P8

現地スタッフ会議を実施しました！

齊藤亮平 (海外事業担当)

現在、イラクにはアルビル、バグダード、バスラの3ヶ所に現地事務所があり、現地スタッフが院内学級や貧困患者支援など、日々病院と協力しながらがんの子どもたちのケアにあたっています。

そんな中、3ヶ所の事務所のスタッフから「他の事務所でも同様の活動を行っていることは知っているけれど、実際の活動の様子や工夫している点など知りたい」という声が上がるとなりました。そこで、現地スタッフミーティングを企画し、スタッフ全員が参加するミーティングを開催しました。初めてとなる試みで、質疑応答やディスカッションでは激しい議論が繰り広げられ、それぞれの地域で行われている活動の現状や課題点などを全スタッフで共有することができました。

各事務所からの報告

バスラ事務所

昨年より院内学級のスタッフとなったイマーンは、自身の娘がバスラ子ども病院でがんの治療を受けており、患者家族の当事者としての視点と、カウンセリングの専門家としての経験も重ね合わせながら、バスラでの院内学級の活動を写真と共に紹介してくれました。また、もう一人のスタッフのサブリーンも幼少期にがんの治療を受けていた経験があり、その時の経験をもとに、子どもたちやその家族に常に寄り添い、励ましながらい、院内学級で子どもたちのケアにあたっています。



バグダードの活動について説明するアブサイド (写真左) とラナ (写真右)

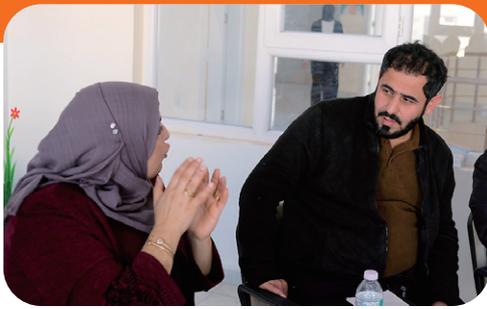
イマーンは「同じがんを患っていても、年齢によって直面する困難な部分は異なります。年齢が上がるほど、がんという病気の特徴を理解するので、がんの説明や話題になった時は気を付けるし、年齢が低い子には常に前向きでいられるようなアクティビティを提供し、明るく接するように心がけています。また、絵を描く時間や遊ぶ時間は、子どもたちにとってとても良い作用があるので大切にしています」と話しました。

バグダード事務所

バグダード事務所のアブサイドとラナからは、中央小児教育病院の現状について説明がありました。病院の老朽化のため修復工事がここ数年続いており、JIM-NETが運営する院内学級の部屋も一時的に使用できなくなっていますが、そのような中でも子どもたちへの勉強のフォローを個別で対応している様子が伝えられました。ラナは「入院中の子どもたちの家族は、子どもの治療や身体のこととは勿論のこと、学校に戻った時のことをとても心配している方も多いです。ですので、子どもたちの体調を見ながら病室で勉強を教えています」と、写真を何枚か紹介しながら子どもたちの病状や病室での様子を伝えてくれました。病院内では、以前、患者家族同士の些細なトラブルが大きなトラブルへと発展したことがあり、現在は、トラブルやその他の問題が起こった際に対応してくれる巡回ボランティアが常駐しており、入院している子どもたちの



アルビルでのピアサポートグループについて話すリム (写真右)



ときには白熱した議論に



それぞれの地域での活動に耳を傾けました



JIM-NET 現地スタッフ全員集合!

安全を守っています。ガーゼ、ベッドシート、カテ
テルや注射器といった感染症対策や医療品の支
援では、病院側からのリクエストを受
け、東京事務所とやり取りをし
ながら病院に届けている様子
をアブサイドが報告しま
した。

アルビル事務所

活動が多岐にわたるアル
ビル事務所からは、それぞれ担
当者からの活動紹介がありました。

スタッフで医師のヒワからは、ナナカリ
病院への医薬品支援の流れやプロセスについ
て、そして医療従事者への研修についての説明があり
ました。バルザンからは、JIM-NET ハウスの宿泊施設、
院内学級、病院内外でのイベントやがんに関する学校
での啓発活動についての報告がありました。そして貧
困患者支援のプロセスや支援実施基準の一つとなる家
庭訪問での質問事項や具体的な患者の紹介がありまし
た。ルームからは、ピアサポートグループ
の概要、イラク国内の難民支援やシリアで
の緊急支援の状況についての活動紹介が
ありました。

各事務所の発表後は、全員でディスカッ
ションを行いました。まず議題として挙
がったのが、「アルビル事務所で実施して
いる活動を、バスラやバグダードではど
のように取り入れることができるか」と

いうものでした。JIM-NETが活動している3つの地域
は、それぞれ病院のルールや地域性、また事務
所の規模も異なるため、実施できる
活動には差が生じてしまいます。

アルビル事務所で行っている
ピクニックや動物園への遠
足、学校でのがんに関する
啓発活動や地域の大学生
が関わるイベントといった
活動を他の事務所では、限
られた人員の中でどう実施する
か。病院や省庁など関係機関との関

係作りや地域との関わり方など、アルビル
のスタッフから具体的なアドバイスもありま
した。

また、患者の子どもたちやその家族との距離感につ
いても話がおよび、「JIM-NETのスタッフとしてどこま
で患者やその家族に寄り添うか、関わるか」という点
は、白熱した話し合いになりました。当事者性の有無
やそれぞれの専門性でもそのスタンスは異なるものの、

どのスタッフも「今、目の前にいる子
どもたちやその家族のために何ができるか」
という意識は共通していることも確認し
合うことができました。

これまででも、それぞれのスタッフが各
事務所の情報は持っていたものの、顔を
合わせて話し合うことによって、それぞ
れの活動を理解し、スタッフ同士の信頼
関係を築く良い機会となりました。



会議後は皆で食卓を
囲みました



JIM-NET 発足20年に寄せて

鎌仲ひとみ (JIM-NET 理事・ぶんぶんフィルムズ代表)



劣化ウラン廃絶キャンペーン

劣化ウラン弾という言葉が日本社会の中で知られるようになったのは、イラク戦争以後だと思えます。実は1991年の湾岸戦争で300トン使ったとアメリカ政府が認めているので、その使用はイラク戦争から12年ほど遡ることになります。2003年以降、イラクの子どもたちに急性白血病や様々なタイプのがんが増えていることが、徐々に知られるようになりました。私が作った映画「ヒバクチャー世界の終わりに」も情報を拡散する一役を担ったのではないかと思います。劣化ウラン弾の被害が知られるとともに、その非人道性に着目し、国際的な劣化ウラン兵器を使わせないというキャンペーンも始まりました。それは主に国連軍として湾岸戦争やイラク戦争に参加したヨーロッパの国々から始まりました。

日本からも複数のNGOや市民グループがイラクへの支援を始めていましたが、その支援はなかなか思うように届かない、効果が出せないというジレンマを抱えていました。

その理由は以下のようなものです。

- 1: 戦後の混乱で医療現場もまた混乱を極めていた。
- 2: 政府がまともに機能していないため、国際的な医療支援を受け入れる窓口がなかった。
- 3: 一方で政府は医薬品の国内への持ち込みを制限していた。
- 4: 包括的な情報が欠落していた。

劣化ウラン弾の大量使用

何か理由がなければ、白血病やガンが増えるはずがありません。その要因として放射性廃棄物から作られた劣化ウラン弾が疑われたのは当然のことでした。しかし、科学的なエビデンスがどこにもない。現場の医師たちの実感に頼るしかなかったのが現状でした。

湾岸戦争で300トンと言っているけれど、私が1998年に体験した砂漠の孤作戦でも劣化ウラン弾は使用されていました。イラク戦争では2,000トンとも言われていて、大量の放射性物質がイラク国内に戦争という名目でばらまかれたし、帰還兵にインタビューしたことで解ったことは、米軍のコンボイの外側にも右軍の誤爆を防ぐために劣化ウランの防護を施



バスで白血病になったムスタファ(右)は、イラク戦争を生き延び、白血病からも生還した



砂漠で劣化ウラン弾に破壊された戦車で遊ぶ子どもたち

してあったとのこと。

しかし、だからと言って病気との因果関係を明らかにするには、とても時間がかかる作業が必要となります。何よりもアメリカ政府が、その危険性を公式に否定するという壁も存在していました。

イラク人医師たちの思い

イラクの医師たちは、崩壊した医療現場で満足に治療することもできずに患者が亡くなっていくことに絶望していました。だからと言って自国の政府に頼ることもできない。

20年前、JIM-NETがイラク国内、6つの基幹病院の小児科、血液内科の医師たちに会議に参加してくれるよう呼びかけたとき、彼らはワラにもすがるような気持ちと、海外に助けてもらわねばならない現状への羞恥と両方を抱えて参加してきたと思います。彼らは誇り高い民族なのです。だからこそ、1回目の会議で『パンと塩』があれば、あとは自分たちでなんとかする」と言ったのです。

JIM-NETの役割

小児白血病の治癒率を上げるには、包括的な医療支援が必要です。国際的なプロトコールに基づいて、治療を一定期間継続することが基本であり、最低条件です。20年前の状況ではバラバラとあちこちで支援が断続的に行われ、白血病のタイプをきちんと診断することもできていませんでした。薬も重複したり、無駄になることも多かった。だから、支援する団体を緩やかなネットワークで繋ぎ、限られた支援をより効果的なものにしようという目的でJIM-NETが発足したのです。

劣化ウラン弾の影響について調べるより前に、まず子どもたちの命を救うことが最優先でした。現場の医師たちとの連携、きちんと診断できるような医療機器の提供とそれを使うための技術を教えること。崩壊した医療現場で奮闘するイラク人医師にとって、毎年行われるJIM-NET会議は医療情報の更新、自分たちがやっていることを再評価するためにとても意義のあることと受け止められてきました。そして治癒率もこの20年で大きく改善したと思います。すべての子どもたちが治癒するわけではないけれど、手を尽くして治療したのだと家族が思える状況がこの20年でできてきたと感じています。

あなた方のことを気にかけています、助けになりたいのです、一緒に子どもたちの力になりましょうというメッセージがイラク社会に伝わってきた20年。寄り添い続けることがJIM-NETの役割だと思っています。

JIM-NET 前史

熊岡路矢

日本映画大学教員・JVC（日本国際ボランティアセンター）顧問



2001年の「911事件」への反撃として、同10月米国・英国などはアフガニスタン戦争を開始した。さらに、911事件と関係なく、また首謀者とされる「アル・カーイダ」グループとも関係がないイラクに対する軍事攻撃も主張していた。2002年12月に在日イラク大使館とコンタクトし、現地視察を志した。（JVCでは、1991年の湾岸戦争から約一年、イラク国内での食料支援など人道支援を行った実績があった。）そして2003年1月、ヨルダンからイラク入りをした。

現地では、イラク赤新月社の案内で、同新月社の産科病院（同年3月の米英軍の攻撃で一部破壊された）、バグダッド小児病院などを訪問した。同病院では、白血病の子どもたちの状態が一番懸念され、また治療も遅れていた。

白血病（血液のガン）の原因としては、1991年の湾岸戦争で使用された劣化ウラン弾（の酸化ウラン微粒子）による影響が推測されていた。イラク南部バスラの子どもの患者さんも2〜3名入院していたようだ。病気のこどもたちは、ベッドに座りあるいは横たわっていた。多くの場合、お母さんたちが24時間付き添っていた。すこし元気なこどもは、おもちゃで遊んだり、絵本を読んでいた。

3〜4歳、あるいは10歳以下のこどもたちの大部分は、病気のことが理解できない様子でそれはそれとして痛々しかった。他方、14、15歳前後以上のこどもたちは青年期に移行するなか、生命や身体、人生・社会のことなどを理解し始めているので、健康や生命にかかわる不安や恐怖、家族への負担などを具体的に考えられるだけ、より一層つらいだろうと感じた。

病室をほんのすこし見ただけだが、10代半ばと思われる少女がいて大きな目がひどく充血していた（ラナさん）。医師の話では病状はかなり進行していて、近く行われる米軍による戦争前に治療のための薬品もそろわず、回復は厳しいという話

であった。その後、2003年3月開戦前に、彼女は生まれ故郷のモスルの実家に戻り、亡くなったと聞いた。

戦争直前、湾岸戦争とイラク戦争の間のつかの間の平和な時期に出会ったイラクの人々。散歩したバグダッドの街にたくさんあった画廊。半抽象画も多く、よくあるデザインともいえるが、大きなキャンバス、空中に大きな目が浮かび、涙ながれるというようなデザインも多かった。

2003年3月20日、軍事的には弱小国ともいえるイラクに、再び、最高水準の兵器で武装した軍隊が『衝撃と恐怖』作戦を開始した。

イラク豆知識

- * イラクは、1980年9月22日、ホメイニ革命や米国大使館占拠などで政治的に混乱する隣国イランに奇襲攻撃をしかけた。イラン・イラク戦争の始まりである。イラク側には米欧、ソ連（当時）、中国などが支援にまわった。当初イラクの攻勢が目立ったが、後半イランが軍事的に巻き返し、双方に100万人以上の死傷者を残し、複数の国の仲介もあり1990年9月イラン・イラク両国は国交を回復した。
- * 経済的にも疲弊したイラクは、クウェートからの借金返済要求を契機として、1990年8月クウェートへの軍事侵攻を行った。撤退しないイラクに対して、1991年1月米英を中心とした多国籍軍がイラク攻撃を行い（湾岸戦争）、イラクは敗北した。このときに米英が使用したとみられる劣化ウラン弾（核兵器や原発使用の過程で生成されるウラン238を武器にしたもの）が、戦車などの破壊で燃焼した後の飛び散る酸化ウラン微粒子が、人体に影響を与えるといわれている。



バグダード子ども病院にて（2003年）



JUSTPEACE! 20

～ JIM-NET発足20年企画展～

崔麻里 (事務局長)

お陰様でこの6月でJIM-NETは発足して20年を迎えることができました。3月14日～19日の5日間は、神保町・文房堂ギャラリーで『JUSTPEACE!20』と題して企画展を開催いたしました。

イラク戦争直後に発足したJIM-NET。今回は、20年前を振り返りつつ、「テロ」「戦争」のイメージとは異なるイラクの表情に触れて頂くことを心掛けました。これまでにJIM-NETが出会った子どもたちの写真と絵画、そして昨年10月にモスルを訪問された田村公祐さんの写真を中心に展示しました。日本国際学園大学の野田先生と学生の皆さんのご協力で約50枚の写真も美しく展示され、イラクの人々の笑顔、市場（スーク）、廃墟の隣で進む復興の様子や珍しい料理など、イラクを身近に感じて頂けたようです。ギャラリー搬入日も学生の皆さんがテキパキと作業を進めてくれ、若い世代の方々がイラクやJIM-NETの活動に心を寄せてくださることで大いに励まされました。

「沢山の方々に企画展に触れて欲しい!」との願いから、会場の空間を活かしたギャラリートークも趣向を凝らしました。昨年、『イラク水滸伝』を上梓され、植村直巳冒険賞を受賞されたノンフィクション作家・高野秀行さんと田村さんとの対談『イラク探訪』は珍しいワインの乾杯で始まり、探検や冒険に興味をお

持ちの方々に満席となりました。

ハウラをはじめ、イラクの子どもたちが描いた絵をアレンジされたファッションデザインで協力くださるデザイナー・鶴田能史さんによる『世の中全ての人へ』トークには、世代を超えた来場者の方々をお迎えし、終演後もギャラリー内のあちこちで会話が続いていたことが印象的でした。オンライン配信でSUGIZOさん（ギタリスト）、サヘル・ローズさん（表現者）、志葉玲さん（ジャーナリスト）をお迎えした『JUSTPEACE! スペシャルトーク』では、それぞれの平和への思いや、世界を取り巻く不安定な状況と「私たちができること」をフランクにお話いただき、約100名の参加者の皆さまと貴重な2時間を過ごすことができました。どのイベントも予定時間では物足りない…のが本音ですが、また次の機会を作ることをお約束して散会となりました。

会期中の5日間の様子は、随時イラク現地のスタッフたちにも共有し、多くの来場者の方々をお迎えできたことをともに喜び合いました。ギャラリートークの様子は、次号の『JIM-NET 便り』やHPでお伝えいたしますので、どうぞお楽しみに!





クルド人の一派であるヤズィーディーの聖地ラリシュ。伝統的な自然信仰を基盤とするものの、キリスト教やイスラム教との習合も見られ、教義には謎が多い。



川沿いにある大モスク。サダム・フセインの治世に着工し、その失脚後20年間放置されていたが、最近になり工事が再開された。

時代の転換点の現場証人

田村公祐

(株式会社エインシャントワールド)

2010年にシリアやレバノンを旅行した際、イスラム圏の少数派に神々しさを覚え、周辺諸国を訪れるようになりました。とりわけイラク北部は多様性に満ちた地域で、宗教建築や祝祭を見学するため、繰り返し訪れました。しかし、その核心部であるモースルは長きにわたり訪問が難しく、ようやくその地を踏んだのはイスラム国(IS)が破壊し尽くした後、2017年のことでした。運良く友人に案内してもらった機会を得ましたが、当時はまだ治安が不透明で、少し覗いたという程度でした。

その後、モースルの有名菓子店よりバクラヴァの輸入を始め、日本でも好評を博していたのですが、現地の事情で輸出が止まってしまい、去年はその解決のために再訪しました。驚いたのは6年前からの変貌ぶりです。埃っぽかった道路は綺麗に整備され、史跡の修復作業も着々と進み、博物館には英語を話すスタッフもおり、熱心に観光客受け入れの準備をしているようでした。ISが目の敵にした酒屋も大通り沿いで深夜まで営業しています。事前に調べていた名所を一通り回り、時間の許す限り写真を撮って歩きました。菓子店のご主人とも4年ぶりに再会し、立派な夕食をご馳走になったほか、何と9泊したホテル代まで全て払っていただきました。

実は今回のお話をいただいた際、トークショーで登壇することには、大いに迷いました。昔から人前が出るのが苦手なのと、特に個人としてしか活動しておらず、素人の自分が発信源になることへの躊躇があったのです。しかし、日頃お世話になっているJIM-NET様からのご依頼で、公私にわたり縁のある土地であり、敬愛する高野秀行さんとの対談ということが決め手になりました。

写真展では去年のモースル市内を中心に、過去に撮影した周辺の少数派地域や、名物料理の写真を加え、モースル一帯の魅力が大まかにわかる構成を目指しました。

依然破壊されたままの場所は多数ありますが、既に復興した場所は現在の写真を選びました。

対談では主に、高野さんが南部の湿地帯やバグダッドについて、私が北部について、戦争報道とは一線を画した視点でお話しました。ここ数年の変化は目覚ましいものがあり、依然として情勢リスクはあるものの、新たな一歩を踏み出そうとする「観光黎明期のイラク」について紹介できたのではないかと思います。

最後に、弊社の紹介をさせてください。オリエント地域の酒と食品に特化した個人商社で、レバノン、アルメニア、トルコより、ワイン、ビール、オリーブオイル等を輸入しています。飲食店様や小売店様への卸売が中心ですが、個人のお客様向けにも、インターネットや直売所で販売しています。現地に繰り返し足を運び、その土地の個性を生かした商品を厳選していますので、ご覧いただけましたら幸いです。



イラクの名物料理マズグーフ。チグリス川の鯉を背開きにして炭火で焼く。小さいもので2kgと大ぶりだ。

The Ancient World

東京都杉並区天沼3-1-8

03-3391-0809

平日 17:00-20:00 /

土日祝 12:00-20:00 / 水曜定休

ancient-w.com



トーク中の高野さん(左)と田村さん(右)

「マンスリーサポーター」にご協力ください!

マンスリーサポーターとは、毎月500円よりご都合に合わせた金額で継続的にご支援いただく方法です。(クレジットカード決済となります。)

イラクでの小児がんの治療期間は平均4~5年です。その間、途切れさせることなく治療を続けなくてはなりません。戦争の爪痕が残るイラクでは、慢性的な医薬品不足が未だに深刻なため、病院に薬がない場合は自費で購入しなければならず、親御さんた

ちは重い負担を強いられています。

ほんの少しでも月々のご寄付が子どもたちと患者家族の助けにつながります。

詳細は同封のチラシまたはホームページをご覧ください。

ご不明な点等ございましたら、お気軽に事務所までお問い合わせください。

☎03-6228-0746



子どもたちの治療を支えてください!



♥ COFFEE for PEACE! ♥ 第4弾の製作が進んでいます。



お陰様でCOFFEE for PEACE!も取り組みを始めて4年目を迎えます。年を追うごとにチョコ募金と合わせて皆さまに親しんで頂けるようになりました。

チョコ缶では、直径5.7cmの丸いフレームの中に子どもたちの絵が収まるようにレイアウトしますが、COFFEE for PEACE!のパッケージでは、9.5cm×10.5cmの四角い枠=額縁に囲まれたように絵をお届けできます。

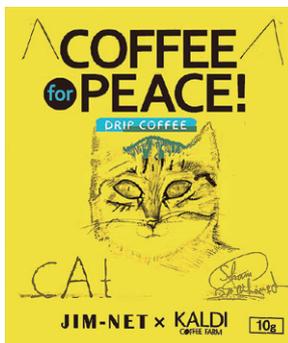
第4弾は、2020年にシリア南部からイラク・アルビルへ逃れ、家族6人で暮らすシャームの絵『Live Tree (生きる木)』と『CAT!』をカルディコーヒーファームさまがデザインを進めてくださっています。

シャームは、イラクへ避難した2年後に血液疾患を発症しました。以来、日雇いの仕事を持つお父さんが仕事を休んでシャームの付き添い、お母さんはシャームの妹と弟の世話をするため、ずっと極度の貧困状態が続いています。昨年末に病状の悪化が判明し、度重なる治療で精神的にも身体的にも疲弊していますが、家族の前では笑顔を絶やさず、将来は英語を勉強してエンジニアになることを夢見て治療に励んでいます。

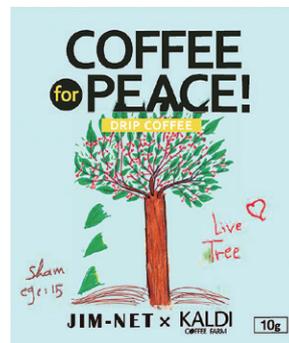
『Live Tree (生きる木)』ではシャームのいのちへの思い、『CAT!』ではお茶目なシャームに触れてください。



スタッフのルームからデザインの説明を受けるシャーム(右)



CAT!



Live Tree (生きる木)



特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

郵便振替口座 00540-2-94945 加入者名 日本イラク医療ネット
Facebook、Twitter、Instagramもぜひご覧ください。『JIM-NETで検索』

募金・サポーター会費はこちらへ➔

